

喬に聲をかけられて、倭文子は始めて我に返つたが、同時に女の誇を失はじと、反抗の色を示して、たゞ冷やかに會釋したまゝ黙つて家の中へ引返さうとした。喬はたまたま二三歩門の中に踏入つて、

『倭文さん、待つて下さい！』と低かつたが力のある聲で呼止める。

倭文子は鷹揚に立止つて、

『何か御用でございますか。』

如何にもそれが嘲けるやうに冷淡な調子に聞えたので、喬はまづ胸を抉られるやうに覺えながら、

『さうです……。どうせ私は貴女には用のない筈の身體です、また實際貴女に顔を合す面目のない大馬鹿もので……。貴女は赤の他人の大馬鹿ものに、素より用は無いでせう。しかし絹子——絹子は誰の子です？——貴女が私に遭つて下さるんでも、たゞ私が絹子に遭ふ事を許して下さい。』と濕を持つた喬の眼光は滿身の力を籠て輝やく。

倭文子は弱味を見せじと飽まで冷やかに、

『絹子は不義ものゝ子と、貴郎は思召して居らつたのです。』と喬を見返した眼には許すまじき色がある。

『倭文さん！ 貴女はまだそんな無情の事を云ふのですか。私は疾から自分の愚に責抜れて居るのです。絹子は昨夜自分の父とも知らず……。また私も自分の子と知らずに、無心に抱上て花火を見せて居る中、天使のやうにこの腕に眠つたのです。貴女はたゞそれを無意味な出来事と思ふのですか。私はこの偶然の奇遇に、深い意味があると信ずるのです。この出来事がなかつたならば、私はかうしておめく、貴女に遭には來なかつたのです。』

『貴君が昨夜親切にして下さつた事は、絹子から聞取りました。——お禮を申上ります。』と何處までも路傍の人に對する口氣である。

喬は接穂を失つて、怨を籠た眼に倭文子を見詰ながら、

『倭文さん、貴女が飽までも私を許して下さい。強て許して頂かうとは云はん。只こゝで絹子にだけ遭はして下さい。私はそれだけで満足して歸ります。』

『絹子はまだ寝んで居ります。』

かう聞くと喬はひどく激した様で、神経的に唇を動かして居たが、僅かに絶望の聲を絞つて、

『……さうですか。貴女は絹子にも遭して下さい。さうですか……。あゝこれも蒔いたものを刈るのだ！』と呟やきながら、『倭文さん、それでは絹子に、昨夜の軍人が遭に來たが、遭れぬので泣

いて歸つたと傳へて下さい。』

喬は熱涙を頬に傳はらせながら、かう言捨るとその泣顔を隠して、踵を返すや否、突と門を出て了つた。倭文子は暫らくその後姿を守つて居たが、大の男がトボ／＼氣力なく歸つて行く姿を見ると、自分もたまらず駈込むやうに松原の中へ行つて、そこに置れた床几の上に泣倒れた。

十分ばかりの後、絹子が母を求めて磯と共にこゝに來た時、倭文子は僅かに涙を收めて居たが、併し絹子にも磯にも喬の來た事は言はなかつたのである。いや今朝の事ばかりか、昨夜の事もまだ磯には知らさずに居たのであつた。

朝の九時ごろに藤田夫人と松本夫人とは打連て倭文子を訪づれた。それは昨夜の事のあつた爲め、倭文子の身の上を案じて見舞に來たのである。磯がその方の接待に急がしくして居る時無心の絹子は獨り別荘を抜出て、公園地の方へ遊びに出かけた。

これより先喬は藤田方へ歸つて、朝の食卓に着いたが、血色の優れぬ許か、何か態度も妙に變つて居て、食慾さへ全然ないらしい容子を藤田夫婦に怪しまれ、僅かにお茶を濁して、頭痛がすると自分に與へられた部屋に退いて居たが、その中藤田は大坂へ、夫人は鍋島邸へと出かけたので、自分も悶々の思を遣るべく、また心惹れて公園地の方へ、藤田邸を抜出したのであ

つた。

喬は一先鍋島邸の裏手へ出て、若しや絹子の姿でも見えぬかと窺いて見たが、それらしい影もないので、そのまゝ公園地へ來て、的もなく木下蔭を漫歩して居る時、意外にもわが求むる絹子がたゞ一人、公園内を鍋島邸の方へ走りながら横切る姿を認めた。喬はわれを忘れて、『絹子さん！』と呼かけたが耳には入らず、絹子はなほ走り出す中に、物に躓いて四ツ這に砂の上へのめつたからたまらぬ、忽ちワツと聲を擧て泣始めた。

喬は急ぎ駈寄つて抱起しながら、砂を拂つて、

『絹子さん、どうかしましたか。』

柔らかない砂の上に倒れたのだから怪我も何もない。絹子が泣ながら見ると、それは昨夜の親切な軍人だつたので、今泣いた鳥がすぐ莞爾、

『小父さん！』と一遍に泣止んで了ふ。

『よく小父さんの顔を覚えて居ましたね。さアまた小父さんに抱して彼方へ行て見ませう。』

喬は喜んで首肯くわが子を抱て、生來嘗て覚えぬ温情を感じながら、日影の榻へ來て、わが膝の上へ絹子を卸し、『絹子さん、貴嬢は今朝母様から何かお話しを聞きましたか。』

『あゝ、母様はね、私の父様のお話をしてよ。』

『え？ 父様のお話を？』と喬は躍る胸を制してそして、『絹子さんは父様を御存知ですか。』

『いゝえ、私の父様死んちまつたのよ。』

喬は驚きながら、

『貴嬢の父様が死んだのです？ それは母様が貴嬢にさうお話ししたのですか。』

『さうなの。私まだ生れない中死んちまつたんですつて——』

『それでは今朝父様のどういふお話があつたのです。』と喬は一所懸命である。

『あの母様はね、私に決して父様の事忘れてはいけませんつて……父様は誰よりも誰よりも一番いゝ人でしたつて……そして小父さん、私の父様も軍人でしたつて……』

喬は咽喉も塞がるほど胸が込上て来て、眼には一杯の涙が浮ぶのだ。

『絹子さん……父様はそんないゝ人ぢやなかつたのです。』

『でも母様がさう仰しやつてよ。』と絹子は腹立しけに喬を見たが、すぐそれも忘れて、『それでは小父さん、私の父様知つてゝ？』

『よく知つてます。』

『さう！』と絹子の大きな眼は丸くなつて、『どんな人？ 小父さんのやうなお顔の生えた、大きな人？』

『さうです。』

『小父さんに善く似た人なの？』

『さうです。小父さんに善く似た人です。』と力を籠て云つて、喬は絹子を強く抱しめた。

(二十九)

この日の午後五時頃、倭文字が獨り物思ひに暮れて居ると、顔色を變て磯が入つて来た。

『奥様……唯今思ひがけぬ久松様がお見えになりました、是非貴女にお目にかゝりたいと仰しやつて居らつしやいます。』

『さう。』と倭文字は別に驚ろく様もなく、只眉を擧めて、『それではね、少し氣分が優れないで臥つて居るのだし、またお目にかゝる必要もないからと云つて、お歸し申しておくれ。』

『あの、それでよろしうございますか。』と磯は却つて倭文字の平然たる素振と氣強さに驚くのである。

『あゝそれでいゝのだよ。』

磯は引返して行つたが、また戻つて来て、

『あの、さう申上りましたけれども、重ねてはお願せぬから、是非一度だけ遭つて頂きたい、そ

れも今日お差支があるなら、御都合の善い時でいゝから、お遭下さるまでは何度でも出直すと仰しやるのでございます。』

『さうと……』倭文子は考へて居たが、『ちや仕方がない、こゝへお通し申しておくれ。』心強くは言ひながらも轟つく胸を鎮めて待つて居るところへ、五紋の緞の羽織を着流して喬が、萎れながら磯に導びかれて入つて来た。

磯が立去るのを待つて、『今朝は失禮を……。よくお遭下さいました。』と倭文子の打解ぬ色を氣にする風で靜かに口を切る。

『私は最早お目にかゝる用事はないやうに存じますが……お暇を頂きました時も、最早二度とお目にかゝらぬと申上た筈でございます。……貴郎も男らしく、どんな結果にも満足すると仰しやつた事を、御記憶遊ばして居らつしやいませう。今更そのお詞をお忘れ遊ばしたやうに、私をお苦しめ遊ばさずとも宜しいではございせんか。』

『倭文さん、私は決して貴女を苦しめに來たのでは有ません。また貴女に對して要求する所があつて來たのでもないのです。……私は母が私に秘して貴女に戻つて頂くやうな交渉をして、恥しめられた事も知つてます。母が恥しめられたのは素より當然で……。私はこの上恥を重ね

るため、貴女に遭に來たものではありません。たゞ私は今日良心の命するところに従つて、直接貴女に懺悔し、罪を謝するため厚かましく出て來たので、たゞそれだけに満足して引退るつもりです。』

倭文子はその熱誠を籠た喬が衷心の聲にも、動かさるゝ容子なく、『いえ、私、決して貴郎をお怨み申して居るところも何もございせんから、今更謝まつて頂く事も、懺悔のお言葉を聞く必要もございせん。』

『倭文さん、貴女の心の解ないのは當然です。それは豫じめ覺悟して來たのですが、併し私のこの五六年來の懊惱煩悶が、どれほど深刻であつたかを知られたら、貴女も多少の同情を以て私の懺悔を聞れる筈だと考へます。……倭文さん、妹は——田鶴は悔恨の聲を残して、最早地下の人となりましたぞ！妹が死を以て償はうとした悔恨の聲も、貴女は聞て下さるんですか。』

『え？ それではあの田鶴さんは……たうとうお亡なり遊ばしたのでございますか。』
『はア、妹はたゞ貴女に濟まぬと、そればかりを言續けて落命したのです。……妹は慥に貴女の仇敵ですが、罪を悔てこの世を去つたのですから、どうかあれの爲に一滴の涙を手向けて下さ。』と喬は拳で眼を蔽ふた。

今まで冷やかに粧つて居た倭文子は同じ態度を續けかねて差俯むくと、その眼からはハラハラと數滴の涙が滾れるのである。

『妹はそれまでにすべての事を自白しました。邪慳な母もそのために全く心が折れて、實に貴女に済まぬと、今は心より悔悟の涙に暮れて居ます。』

倭文子はハンケチを眼に押當たまゝ黙つて居る。

『倭文さん、どうぞ妹と母の罪を許して下さい。妹は慥かに貴女に對して残忍な所業をしたに違ありませんが、私が充分に貴女を信じて居て、心にそれを迎へなかつたならば、妹の陰謀も中傷も、施す餘地が無かつた筈です。妹は悪かつたにしても、根本の罪は私にあるのですから、一言妹の罪を許すと云つて遣つて下さい。』

『私、最早田鶴さんを怨むところはございません。……却つてお氣の毒に存じます。』と倭文子は聲を震はして云つた。それは倭文子の心の叫であるを知つて、喬は太息をほつと吐いた。

兩人の間に暫らく沈黙の續いた後、双方の眼がひたと合つたが、倭文子の心が折れたと信ずる事は、喬をして次第に大膽ならしめた。

『六年間、私の生活も、どれほど荒蕪を極めたか、たしかに貴女の同情を呼起す價値があると信じます。』

倭文子はまた俯むいて暫らく黙つて居たが、

『貴郎は一度奥様をお迎へ遊ばしたやうに伺つて居ります。』

それを云はれるのは喬に取つて大なる苦痛である。

『私が自暴自棄の生活を送つたのも、妻を迎へて見たのも、たゞ煩悶と不平を消す手段であつたのです。併しその結果、大なる不愉快と、一層の煩悶と、家庭の不和を買得たのみです。この六年間の生活は實に冬枯の荒野のやうな有様で、この間嘗て少しの温情をも味はつた事のない身が、昨夜絹子によつて始めて、六年來の滋味を覺えたので、その時の私の心持はどうあつたと考へます。……私は昨夜は一睡も出来ませんでした。……自分の心柄とは云へ、こんな可愛い子まで捨て了つたかと思へば……』と言さして彼は堪へ得ず詞を切つたが涙を呑んで、

『倭文さん……貴女は最早私に罪を償ふ機會を與へて下さらんか。』

倭文子は再び冷かさを回復して、

『罪を償ふと仰しやいまして、私は貴郎に罪があるやうに考へて居りませんから、もうそれでよろしいではございませんか。』

『併し私は貴女に苦痛を與へ、侮辱を與へた外には、貴女に對して何の酬ゆるところも無かつたのです。貴女が若し再び私に許して下さいれば、必らずそれを償ひます。』

「私は最早再び人の妻にならぬと決心して、こゝへまるつたのでございます。貴郎も只今何も要求するところがあつて来たのではないと仰しやつたではございませんか。」

喬はぶる／＼震へて居たが、

「貴女はどうしてもその決心を變る事が出来んと仰しやるのですか。」

「ハイ……」

喬は絶望の眼光で暫らく倭文子を見つめて居たが、

「……それでは如何とも仕方ありません。……倭文子さん！これから先此絶望に驅れて行く男の前途に、若し憐れむべき事件があれば、たゞ一掬の涙を澀いで下さい。」と熱涙は潸々として彼の頬を下るのである。

倭文子はそのまゝ喬の膝に身を投げかけたいほどに心を動かされながら、それでもなほちつと耐へて黙つて居る。

「倭文子さん！今はたゞ貴女の命令のまゝです。歸れと仰しやればすぐ歸ります。そして二度と貴女にはお目にかゝりません。」

「どうぞお歸り下さい！」と倭文子は心を鬼にして云つた。

「ハイ……それではお暇を致します。」と喬は血の氣のない迄に青ざめて立上る時、後の廊下に

パタン／＼と小さな足音がしたと思ふと、満面に笑を湛へて、駈込んで来たのは絹子である。

「小父さん！」と絹子はいきなり喬に取組みながら、「今ね、花子ちゃんと遊んで、お家へ歸つて来るとね、よその小父さんが来てるつて、磯がいふのよ。きつと私の小父さんに違ないと思つて来たら、やつばしさうなのよ。……私、嬉しいわ。母様。これ私の小父さんよ。」

倭文子はたまらず顔を反けて涙を隠した。

「母様、私、小父さんとお遊してもいい事？……、母様、……いゝでせう。小父さん、私のお室へ居らつしやいな。」

喬は涙の堰上て来る顔をこれも、紛らすため俯むいて、絹子の頭を撫ながら、

「絹子さん、小父さんも貴嬢とお遊びしたいのですが、母様が歸れと仰しやるから、貴嬢のお室へ行く譯にいきません。また小父さんは最早絹子さんの顔を見る事が出来なくなつたのです。これからすぐ東京へ立つ積なのですから……」

「小父さん、歸つてはいやよ。母様、小父さんを歸してはいやよ。……小父さん、もつと居て頂戴な。」

「倭文子さん！」と喬は聲を絞つて倭文子と呼んだ。……倭文子は蒼ざめた顔を舉ると、「絹子があれほどに申しますから、暫らくこゝに居らつしつて下さいまし。」

かう聞くと絹子は勇み立ちながら、

『あゝ、小父さん、それでは私の御殿を持つて来て見せますから、こゝに待つてらつしやいな磯！ 磯！』と磯を呼立てると、磯はこれも眼を泣腫しながら襖の蔭から飛んで来る。

『あのね、磯、私の御殿を持つて来て、小父さんに見せてあけるのよ。』

『あゝ、さうでございますか。それがようございます。それでは磯があらで組立てゝまゐりませう。』と絹子は磯と共に二人を残していそぐ座敷を駈て出る。

わが子の後、姿を濡んだ眼で見送つた喬は、その瞳を轉じて、倭文子を見ると、倭文子は兩手で顔を蔽うて歎息して居るのである。その刹那に喬はいきなり倭文子の前に坐つた。

『倭文子さん、貴女は絹子を可愛くは思はんのですか、あの可愛い絹子を、どこまでも父の無い子にしてふ考ですか。え？ 倭文子さん、父と知らずにこれほど私を慕つて居るものを、父は死んだと、長く／＼偽はるつもりで居るんですか。』と喬の胸を絞る聲音は、倭文子の胸を抉るばかりに響く。

歎息の聲が一しほ高まる。風に揺ぐ木の葉のやうに倭文子の身體が顫へて居る。

『絹子のために私の罪を許して下さい！ 貴女は絹子の後楯が欲しい事はないのですか。』
『喬様！』と倭文子は涙のひまに輝き渡る顔を擧げると、『絹子には最早叶ひません。』

見よ倭文子は遂に喬の膝の上に泣伏したのである。

夕暮日は淡路島山の一角に落ち、海には金色の波揺つて、松の梢に神の榮光を讃ふる如き調の聞ゆる時、喬は満身に希望の光を浴びて藤田家へ歸つて来た。快活な夫人が出迎へて、

『おや、久松さん、貴君、どこに行つてらつしやいました。何だかひどくそわ／＼遊ばして、

……今朝の御容子とは、大變な違ではございせんか。まアどう遊ばしたのでございます。』

『奥さん、喜んで下さい。私は失なつた妻を回復しました。』

『え？ 何でございますつて？』

『貴女が今朝お訪ね下さつた川上倭文子は、私の舊の妻で、絹子は私の實子なのです。』

斯う聞いても藤田夫人は容易に信じない位であつた。

正木貞雄と遠山藤乃の二人は、夜行で東京を立つて来て、この朝濱寺へ着いた。それは倭文子が電報で二人を呼迎へたからである。

倭文子は義に正木の歸朝を迎へた際、藤乃に向つては、十年以來の戀を捨て、正木と自分との間を斡旋せんとするその好意を謝すると共に、自分が飽まで正木の妻にならぬ決心と、その事のまた絶對に行ひ得べからざる事を語り、併せて自分の正木に對する戀は單に過去のものに

過ぎぬから、今はどんな事をして、藤乃と正木の間に周旋する積であると告げ、同時に正木に向つてもその意志を語つたので、正木もまた全然同一の意見を持つて居たのである。併し正木は藤乃を妻にする事については、猶他日の問題であると云つて、直ちに承諾の意は與へなかつた。藤乃の方でもまた、二人が絶対に結婚せぬといふならば、自分だけ正木の妻となる事は望まぬから、豫ての覺悟通り、終生獨身を守るつもりであると主張するので、いづれの話もまだ煮切らぬ中に、倭文子のみはその決心を示して、濱寺へ身を避けて了つたのであつた。

倭文子は今藤乃と貞雄を前に置いて、藤田の新築披露會における出来事から、その次の日に互つて起つた事柄を漏なく語り聞せつゝある。

二人はこの演劇的物語を聞いて、共に涙を誘はれ、絹子と倭文子が再び人生の幸福を回復し得た事を、心の底より喜ぶのである。

『さういふ譯で、私はまた久松へ歸る事に決心しましたが、それに就いて、貴女方お二人のお身の上も、今度は是非極て頂きたいのです。』と倭文子は二人の容子を見ながら、『それでないと私は快く久松へ行く事も出来ませんから……』

正木も藤乃も無言のまゝ差俯むく。

『ねえ、正木、私の爲にどうぞさうして下さい。』と倭文子は詞に力を籠める。

倭文子の爲に一身を捧げて厭はじとする貞雄には、今更倭文子の懇請を斥くる重大の理由は何も無いのである。のみならず、倭文子が久松へ再嫁する以上、貞雄が獨身で居る事は、或は再び第二の煩を持来す原因とならぬとも限らぬ。實際倭文子の將來を幸福ならしむる所以は、貞雄がその身を定むるにあるのだ。貞雄は暫く俯むいたまふデツとして居たが、顔を擧ると、『この上は貴女の仰せのままです。』と嚴に云つて、『今日でもなほ藤乃さんが私の妻となる事を承諾せらるゝなら。』と繼足した。

倭文子は満足の吐息を漏らして藤乃に向ひ、

『藤乃さん、貴嬢のお考は如何でございます。一度あんな考を持つた正木ですから。押つけがましく申上るのも何ですけれども……』

藤乃の答へぬ中に、

『藤乃さん。』と正木は呼かけて、『貴嬢がお答をなさる前に、私は自分の感情を露骨に申上ませう。私は貴嬢を尊敬し信頼する心は誰にも譲らん積ですが、今迄嘗て貴嬢に對する戀愛を感じた事は無つたのです。今も決してそれを感じて居ると申上る勇氣は有りません。併し私は貴嬢には多大の感謝の念があります。どんなことをしても貴嬢に酬いなければならぬ恩義があります。

す。此尊敬と感謝の念は、或は戀愛の不足を補ふ事が出来ませう。夫婦間の幸福は、決して青春の戀に酔ふ事ではないと信じます。私は今屑よく貴嬢の意志の力に屈服するので、將來は長く貴嬢の忠實なる良人たる事を期しませう。』

『その思召が私に取つて何よりの福音でございます。……妻にお迎へ下されば、この上の満足はございません。』と藤乃は靜かに答へて、『倭文子さん。貴女にはどうしてお禮を申上げませう。』と微笑を浮べて、ほんのり眼の縁を紅らめた美しい顔は、十年來の思を達し得た喜びの色に輝くのである。

二對の結婚はこの秋の初、殆んど同時に行はれた。藤乃の婚禮の調度は、一切梅小路伯爵の手に賄はれたので、藤乃の伯爵家における家庭教師としての感化は、既に遺憾なく行はれ、瑞枝は早くも十六の春を迎へ學習院女子部に才媛の譽高く、勝人も男子部の麒麟兒を以て目せられ、伯爵が既に戀愛に意なくして、只一意子等の成人を樂しみとするのである。

此二組の結婚のあつた頃、松平子爵と夫人錦子の離婚問題が端なく新聞に新しい神を作つた。

月 魄 倭文子の巻 終

昭和十四年一月十日印刷
昭和十四年一月廿五日發行

月 魄 (完)

【定價貳圓】

一 製 復 許 不 一

著 者 菊 池 幽 芳
發行者 大 谷 德 之 助
印刷者 大 洋 社 印 刷 部
東京市神田區神保町一ノ三〇
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行所 東京市神田區神保町一ノ三〇
大 洋 社 出 版 部
振替東京五九〇二番

部 本 製 社 洋 大 ・ 本 製

大 洋 社 版 最 新 刊 名 著

窪田空穂著 歌評と 短歌 隨見 新四六函入上製 定價壹圓八拾錢	澁川玄耳著 支那 獵奇 秘話 新四六函入上製 定價參圓	澁川玄耳著 支那 哀怨 秘史 新四六函入上製 定價參圓	小林篤里著 英傑 豐臣 秀吉 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 名將 眞田 幸村 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 志士 高山 彦九郎 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	大隈博誠著 必す立身 出世する 名前の附け方手引 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	松尾五郎著 必らず 儲かる 株式相場の實戰術 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	前田默風編著 眞行 草字 鑑 菊版入特製 定價貳圓	庄野信治著 戰時 下の 式辭挨拶手紙教本 菊版上製 定價壹圓五拾錢
--	--	--	---	---	--	---	---	--	--

大 洋 社 版 不 滅 の 聖 書

宮島蓬州著 雲水 は語 る 新四六函入美本 定價壹圓五拾錢	原田靈道譯著 新譯 大般 涅槃 經 新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	里見達雄譯著 新譯 法華 三部 經 新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	岩野眞雄譯著 新譯 淨土 三部 經 新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	三井晶史譯著 新譯 大品 般若 經 新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	宮島蓬州著 禪に 生き る 新四六函入美本 定價壹圓五拾錢	宮島蓬州著 續禪 に生 きる 新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	後藤大用著 禪の 新講 話 新四六函入上製 定價壹圓五拾錢	落合寅平著 歎異 鈔新 講話 新四六函入上製 定價壹圓五拾錢	楠正康著 歎異 鈔新 講話 新四六函入上製 定價壹圓五拾錢	中野松堂著 信仰 生活 大慈 悲 新四六函入上製 定價貳圓
--	---	---	---	---	--	---	--	---	--	---

大 洋 社 版 絕 讚 療 病 書

長濱三良著	堀越龜藏著	藤野懿治著	萩原良一郎著	堀内信著	醫學博士 藤井靜雄著	醫學博士 高田重正著	醫學博士 朝岡稻太郎著	醫學博士 增井龍惠著	佐藤進一著			
男	女	性	典	新療法	皇漢藥醫方詳解	家庭療病寶典	胃腸療病全書	血壓療病全書	結核療病全書	神經衰弱根治療法全書	蓄膿症根本治療法全書	不老強精術
新四六判函入上製 定價貳圓	新四六判函入上製 定價壹圓五拾錢	菊版函入上製 定價貳圓	新四六判函入上製 定價貳圓	新四六判函入美本 定價壹圓八拾錢	新四六判函入美本 定價壹圓八拾錢	新四六判函入美本 定價壹圓八拾錢	新四六判函入美本 定價貳圓四拾錢	新四六判函入美本 定價壹圓八拾錢	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢			

387
644

終



版社洋大

sin